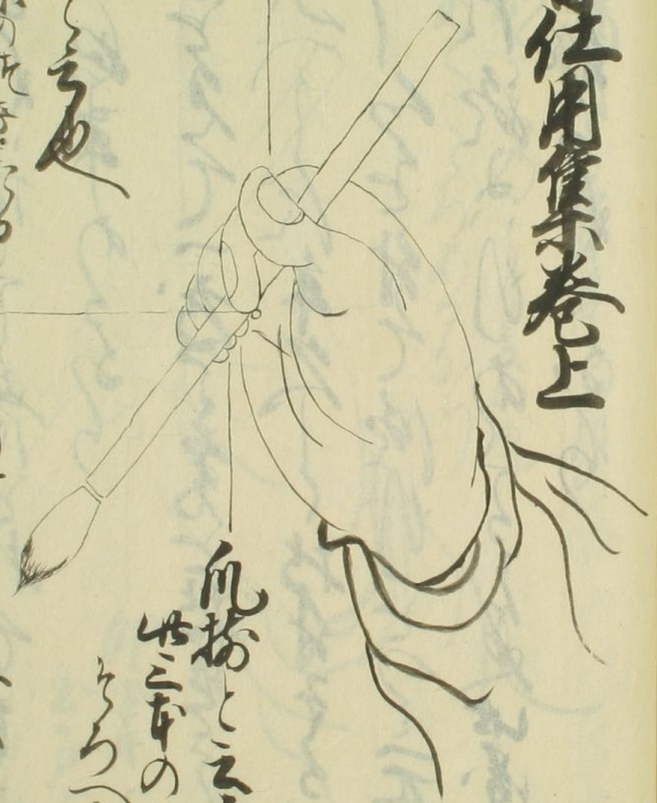
年賀仕用集

チ多6
2235

門 移6
2238
巻

昭和二十年一月廿五日 大正大学

年賀仕用集巻上



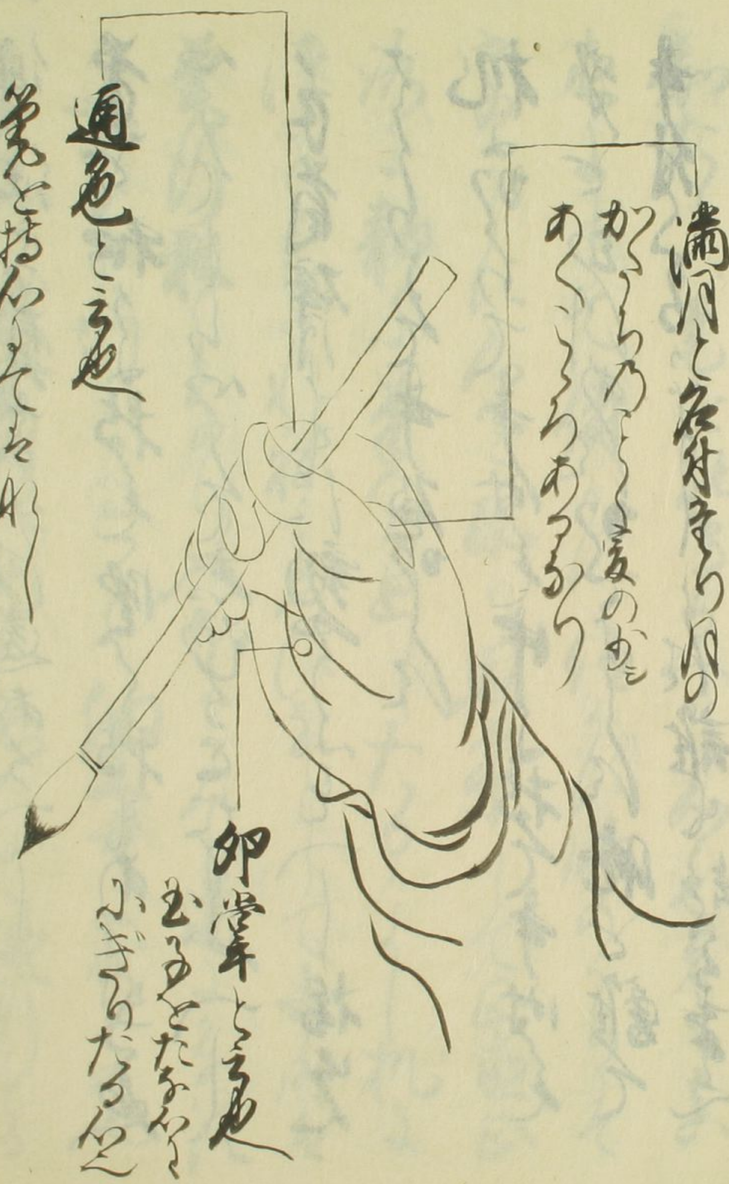
如意と云
はぎ木のはきたる
こゝ〳〵親ゆしの外ち
人さゝ方中ぶゝと
志ゝ也〳〵

肩指と云
はぎ二年の指先
ゝゝ〳〵色し

肩指と云人さゝ先い
指むしゝゝ中指の肩源の
肉ゝ神と高く手〳〵

一　年寄衆にはかり若い出人筋の者
ものふりを分べし乳癖をも教ましに
持つれば骨と折て故ふ
ものふりの事有るべし

一　世間とうとて一度と持参さうと
なるべし年久く持参する者
ふつゝを分て流りとつゝ一度
度を流よりあるべし世間の私の
見聞するもの



一 筆は中程をかるく持ちかるくとはがき
但 細字真書ハ遠あるべし
一 筆を和らかに持て強く持もあしきを
心得て志しを立ん人は
手首肩腕共に動かぬを上手
とす 其先
一 机に向て手付て中に持て手付て
身を動かして腕を離て
手付るは離も知る事
二 知たるべき色を能考へ人を見て
書よして俗だに伝だ胸のうちを
字にたに心を配り思案して正直
流に静ふ筆を用たるのち机に
法をもし祈りて手付て
筆の形をかりて道よりたる
文字もの。こゝに細工成もの
一 手紙は慇懃に物して懇ねるも
可ち故なく記物とかりして情を

都にも又可なり和とうたはるる事と
思ひこそすれ当時の人々よりは事
不慣用なれども拙なりて年久しく
仏教を学び経書をよみて性を
一筆とすること年来専一なれども又
左右に動くこと右に動くこと
思ひ定めたることなく事々に但の
如し右に領ぜし人の天性生涯を過す
一流なりと云ふべき先出人なりて

稲乃は先祖の和うよ真の事を
ふる筆とせられし海ゆかれ先
師中さまの人のわが新なる
多く小姓にて浩さる筆也
性ふ事得ること行要とをし
仏言ぬ対の事ふちてきる
もの筆ふるものを

一運筆と云事あり筆数と早
く遅しと重かつて雅なる法

弱くして世界と動くとい四位
先ずして物ちの義と運ちのいろの
ちつまり元亨書人いちのち
のくし

一 習徽と云事あり己が刑極と云
文字の口ちと似たるを伝のちり
遅しと云ちなる用して義の極と
さしれいち似てちつもちやきも
一 神靈と云事あり字の形ちと

似を見ちもせいまちち事ちれ
ちもつあんとい新ちちの
見入て習ふ文字の靈とちの
あり目ちあり口ち深ちれば
見てねものあり義ちの見ち生で
れのものが事字ちち見説入ちり
一 四隅と云事あり文字とちなく
ちてあり 漢義ちうちちち
世界と表ちして馬ちまきち

一習性と云事あり我とわがこころを
ものゝよろこぶ所をもとめ事を
物と数ふるも心と物と事なり
出ものゝふるまひ所業の面白
ふん分ごとくにまゝ四つ又五あり
ふとゝ業度も物ゝ所はい
ゞ移ゝとき人を流ゝあるを
ものゝ所ゝて業

ゝ流きふるゝ事道皆同
されば人ゝ所ゝあるもあり戯
なとゆゝ所ゝふや

一文字と懐と云事あり文字の日と
ゝ事べし必あきやうもあり
なり文黒白ふゝ事ゝ行あ
一業勢と云事あり字のあ
ともゝ字のいきをうるあり
ふ事ゝきあり

一　[illegible]

一　[illegible]

義之の[illegible]

一　[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一 右の[illegible]と、[illegible]

常々大[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]道[illegible]事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 業道乃秘事 一貫伝 一文字

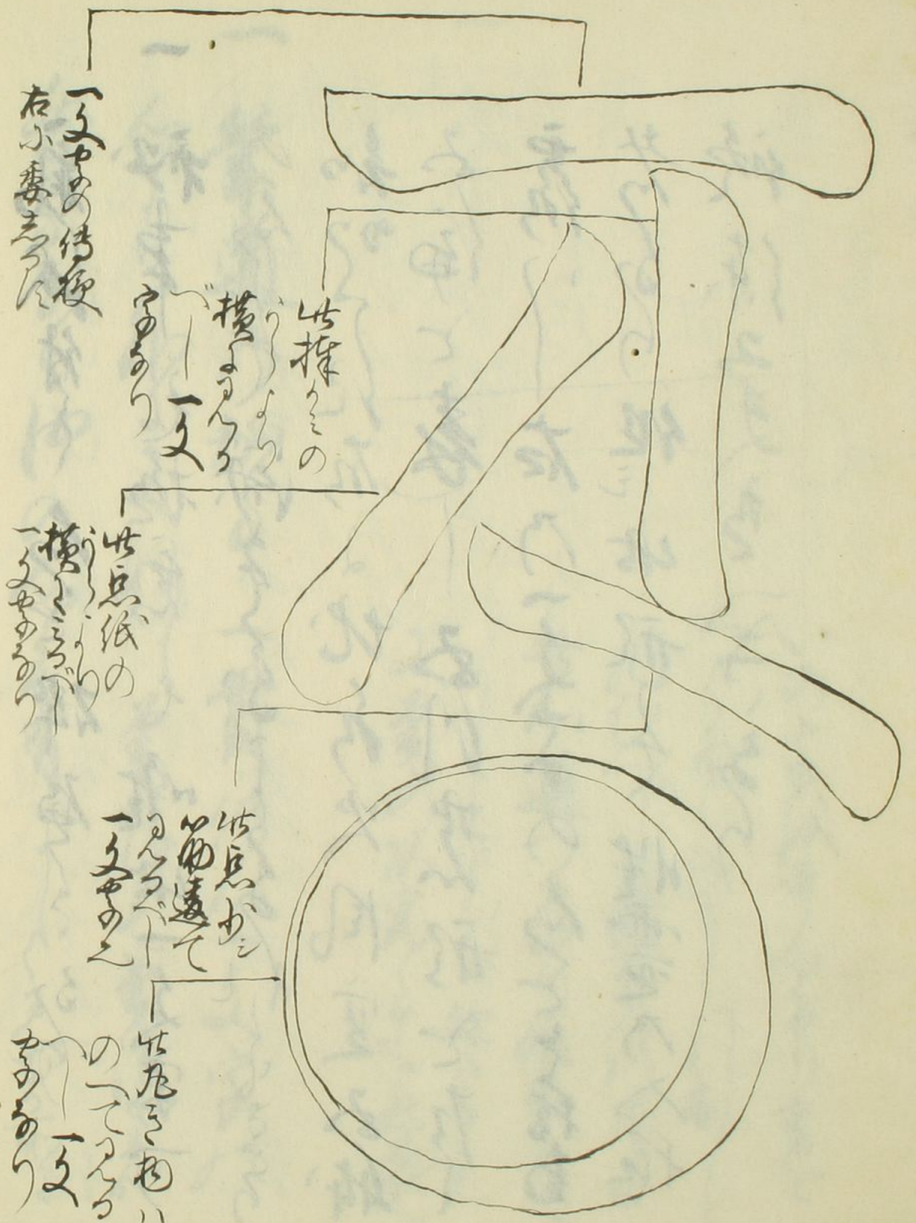
一 秘事も極意も唯此一文字一つ

知ること能わざる地形火風空五輪

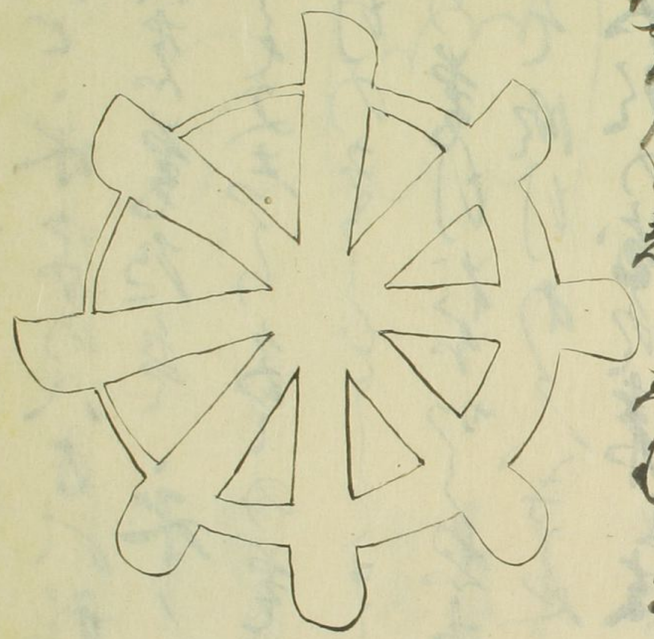
五倫と表し 五輪乃一文字の心と五倫

五輪乃心 性此形と表 性霊乃入根

五輪乃文字



右名ゝよ寸ゝ一文ずつ
見ゝ見ゝと合て一神とれて
元本ゝと云ゝ

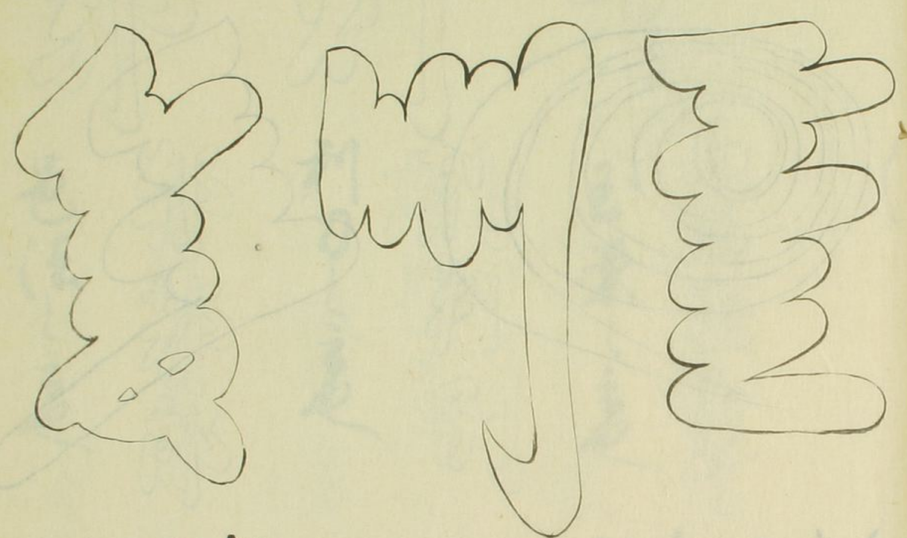


いろはの打付
消りゝ日かの
名前ゝ一文ずつ
又竹九さね
順も逆も
本名ゝ

一是と、永字の八方形と云うの
真書の筆法有り、永ノ一字にて所と云
第七又云う多くの筆勢有と云ふ
所以の事なるべし
云う筆勢なかるべし
して所以あるべきなり

右五形の筆所法

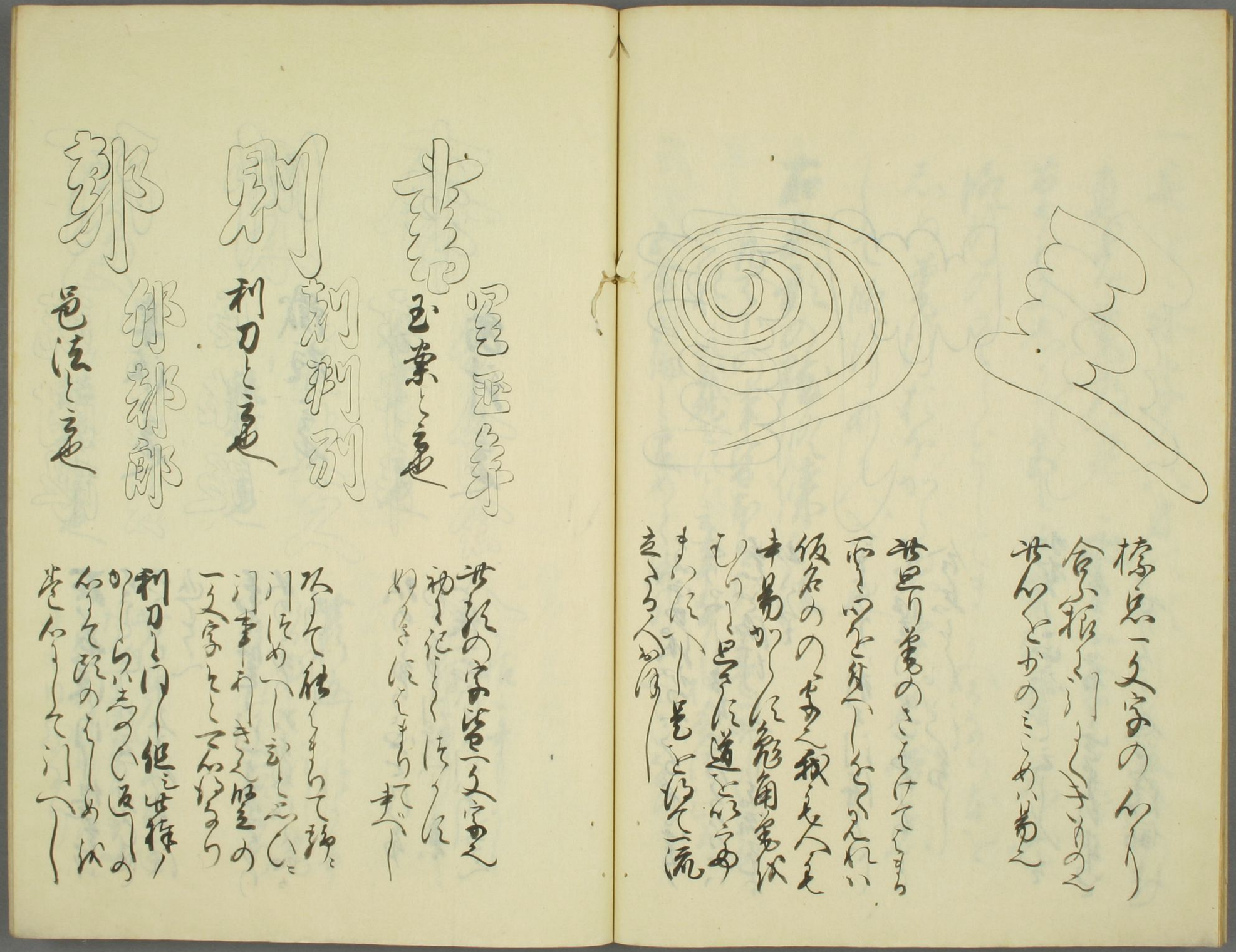
凡そ下の事なれども四くらる
これは道筆法を以て事なり
必常心得と云めく所以なきなり



又字の紙なるべき筆勢
よりまし事なるべきこと
筆と所以なるべし法流筆
出ること

まらうい別ら門得なし
筆八法の一文字なりと
今点なれば筆

加賀ノ二四点と云しへを
つ事と常と世事の事を
と世ならと也筆法御也


玉葉と書
利刀と書
邪法と書

阿　阿阿阿

皐法と云也

阿阿阿

鐵板と云也

非　非非非

斗升と云也

右の色法と同位也

皐と云て悪しく返

のくくまをめくて

返てと

色心堅と云一文字の

外のくまりめの有と和

り云へし

外のくまり心と法の

行とを云て悪しく返

と後一云へし云あき

合　合合合

合掌と云也

非　非非非

ノ弥折と云也

多　多多多

ノヲ諾捺と云也

ノ有よ手もとり

ノ有よ手もとり

世界と云ひ為の第遠

なる一文字なり文

字有よりと云て

手もとりあり

啄鷲と云也

又又又

〻〻寛標と云也

為為為

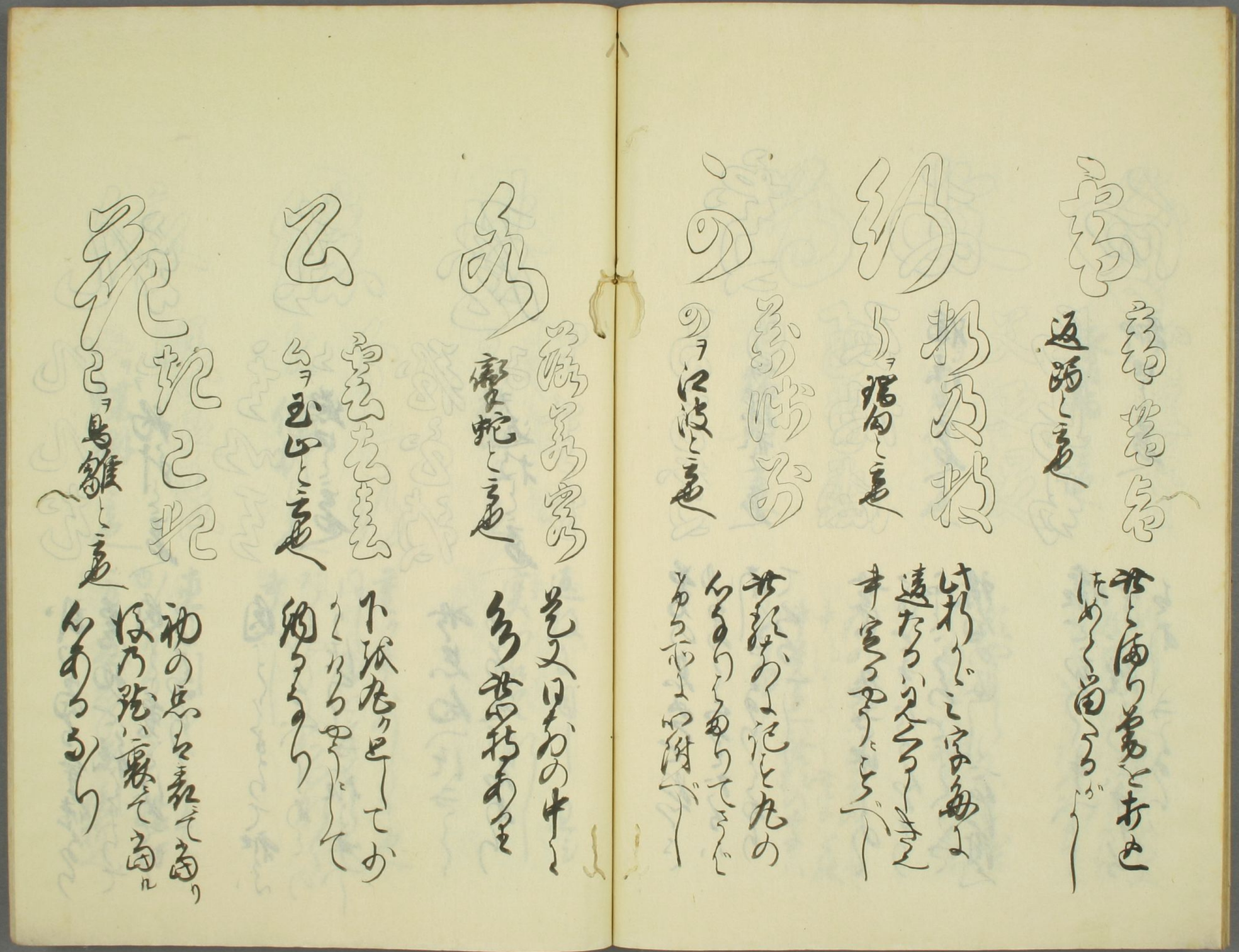
白猿弱と云也

妙行天蓮華文
以上ともぬいめとも
きのためなり

既やうふ月能
くもりて姿ふくなり

為の字ハ為なりて
まことに芸字と能
手先生に芸字のやハ
敬弟

〻〻〻



返波と云

ウ 蟹と云

ノ 海波と云

ヲ 蛇と云

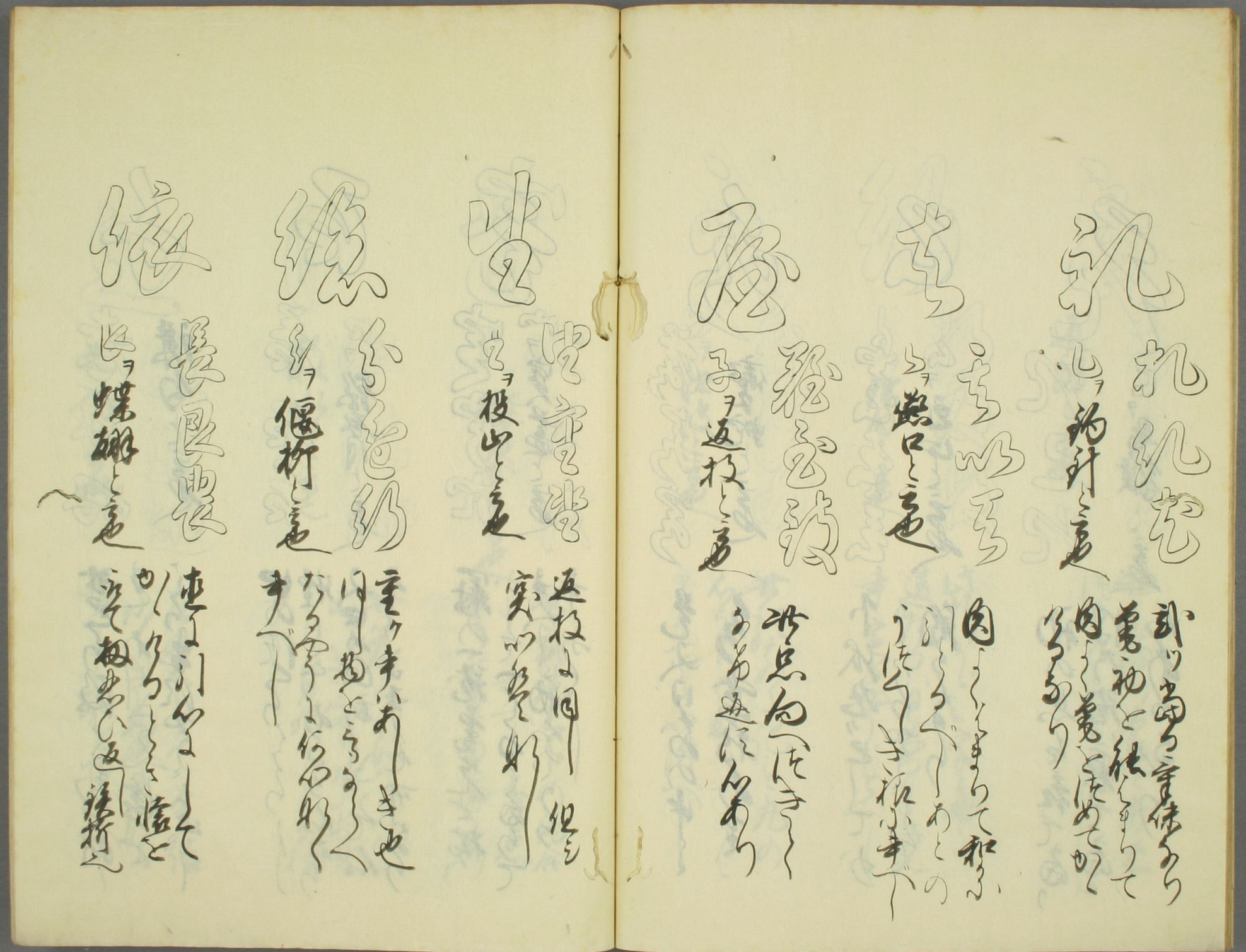
ム 玉と云

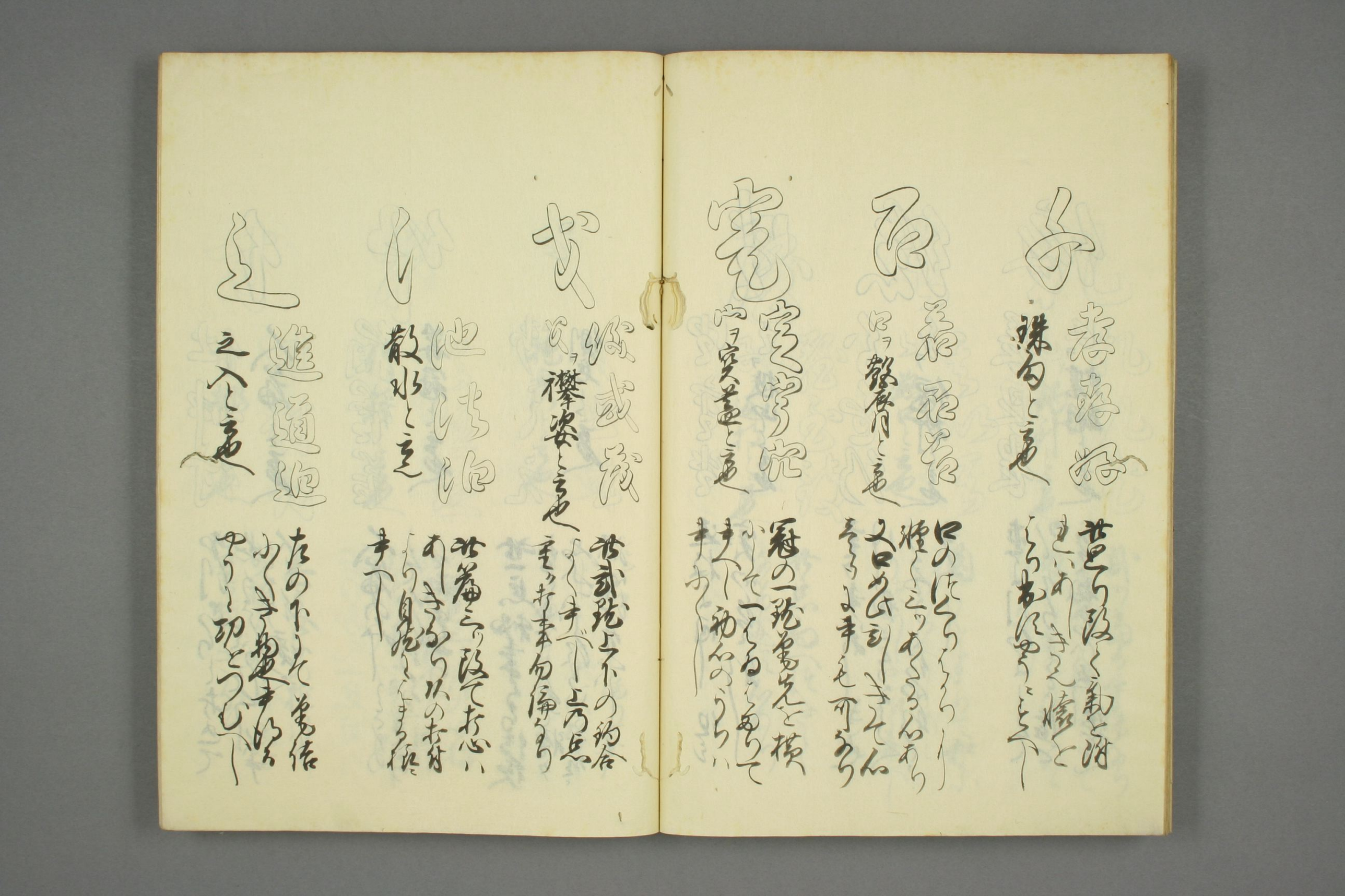
ヒ 鳥雛と云

ヒ 蛇と云

ヒ 蛇と云

ヒ 蛇





珠句と言也

昔より段々動き消きえ消きえ燈と
なる也

口のはたらき
種々こゝろ
口めを動きて
きそん
なる事也可なり

冠の一筋為先を横
ふせて一てゝ
まつて初のうらい
まふ

攀姿と言也

此武筋上下の形合
なる事也
其の形事句備なり

散水と言也

此篇こゝ段々おゝ心ハ
あきらかなる以の未分
なる見れば
事也

之入と言也

道道

左の下して為信
ふる事也事の
やう〳〵功とつむ

仁 仁部行

人篇と云

人篇のみ

筭冠と云

側点と云

世一点秘事なり

抱字と云

世点二十月の内

竹籠と云

寸部と云

点一文字の振り仮名

門

郭と書

圓

日郭と書

鳳

鳳凰と書

氏

萬世と書

米

米象

北海と書

米

米北象

世界と書

米

米北象

北海と書

氏

氏氏

氏

氏

見

枝橈と言

安

安安安安

貴志と言

岡

岡岡岡岡

薔薇と言

下

下下下下

下鷺白鬼と言

右

右右右右

遊抱と言

也

也也也也

岸源と言

毎　毎梅海

食懸と言

指　指歩歩指

兎就と言

弓　弱尼尺

鹿角と言

世界共物の如く
中のうちに物有て
俗人のつまられい事
易かりし

世界共物の如く
肉あるゆへ事

不　大欠夕夕

拍情と言

世界共物の如く
食そうこと結構

天　京小夕夕

横笛と言

世界共物の如く
元と調る事形容

用　用角用

小ヲ曲尺と言

世界共物の如く
出来ま〻用ある

心

真忠と云

月花に紙を切りて
忠心の中の忠と
思ひ入れの心なり

悪玉

小人と云

姫の武ツい美ちゃく
て悪の玉に小人の
ちゃくなり

力

石力と云

世界の女丈夫の
ゆゝしき強力の忠
いめ下のあきら

草

返魂と云

世界の草の花
同様に花を咲て個
くまるべし

菜

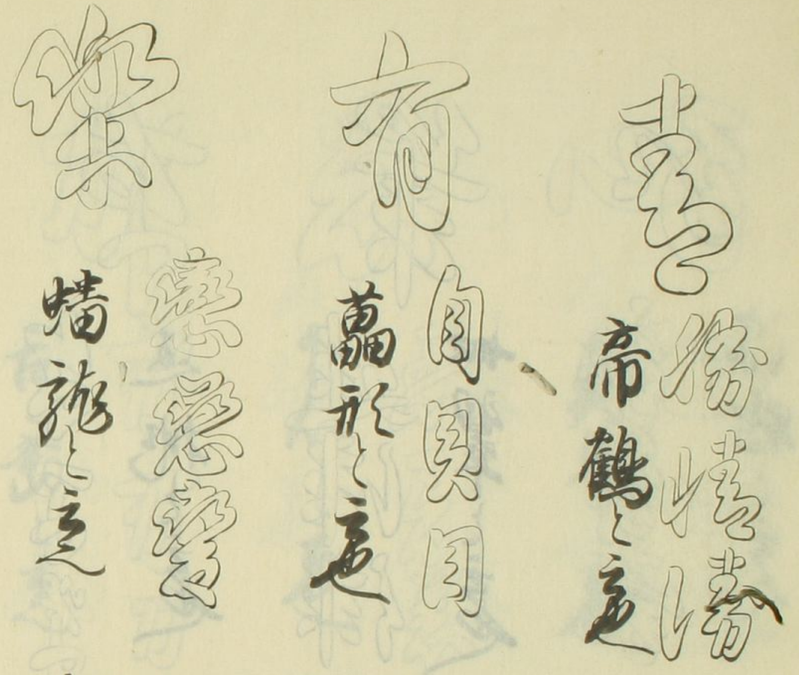
如翠と云

三ツ目の忠にて
おんな者美姫と
彼れ者こもの

蛭

海鵜と云

世界の毒虫
くらいてとろろ
とのれい恰合形象



帝鶴と言

縹形の篇目なり
文字つまやうに
付くべきなり

有

自見目

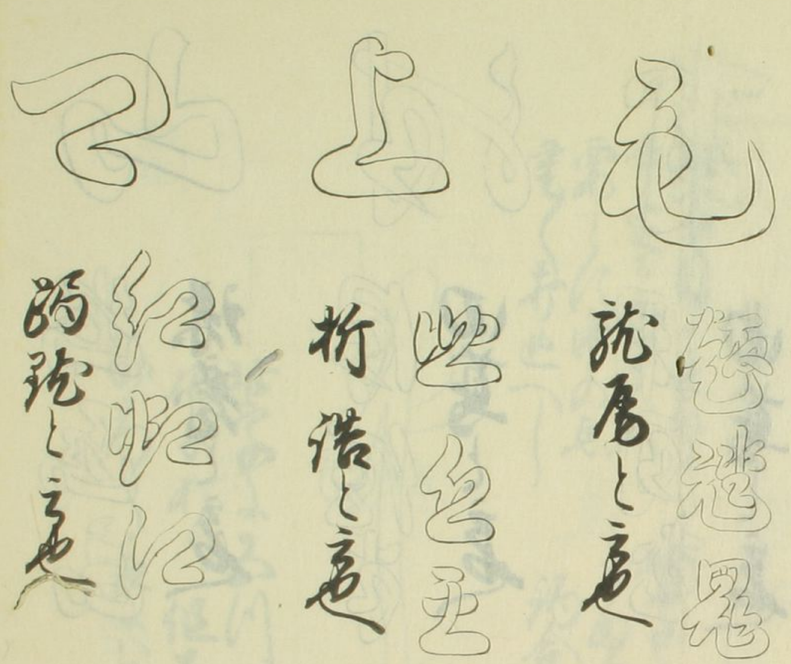
蟲形と言

世人の見きわめて
書の早きおそきを
付けてしるべし

樂

蟠龍と言

世人の書に
樂の字を
用ひるなり



元

流麗と言

世人の書に
元の字を
用ひるなり

上

折衝と言

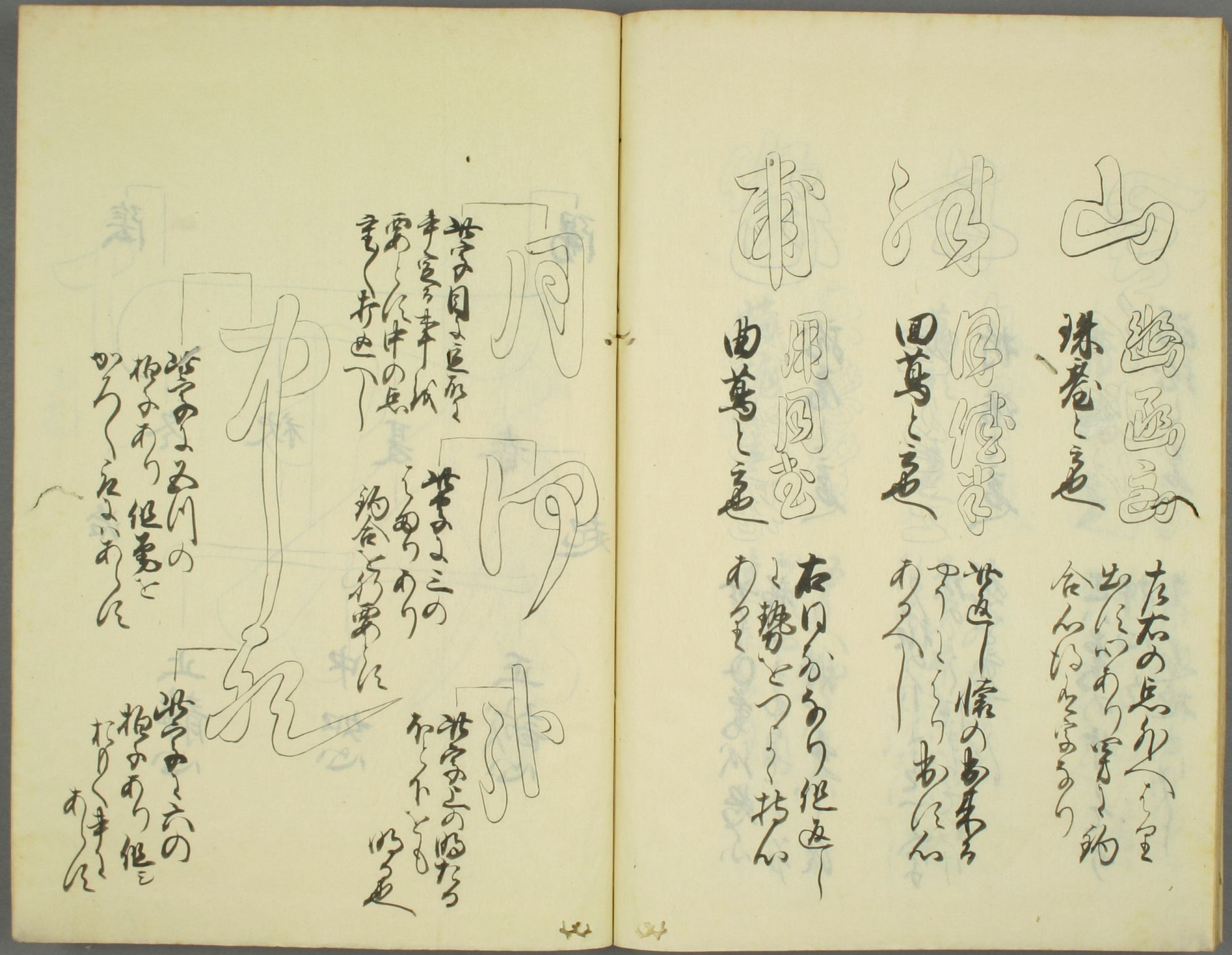
上の字を
用ひるなり

弓

弱弱と言

弓の字を
用ひるなり

上の書の中にて
押心にて
下へ遂抱なり



珠巻と云也

右の点々出たるは宮の合印なり

四萬と云也

世界情の由来なり

由萬と云也

右は名ある但世界と云ふ

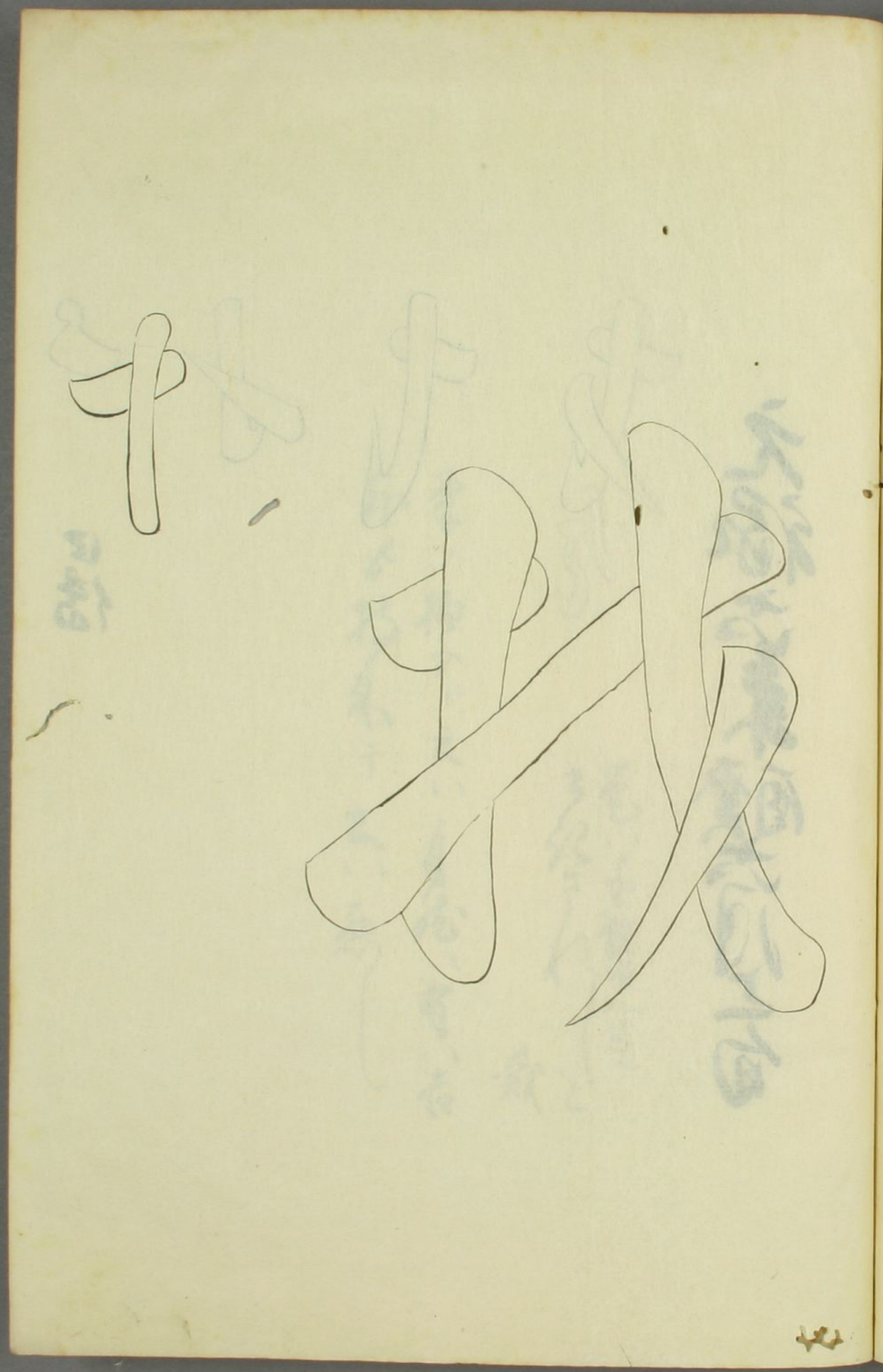
世界の目は直形
本宮の本体
宮と仕の点
云々仕也

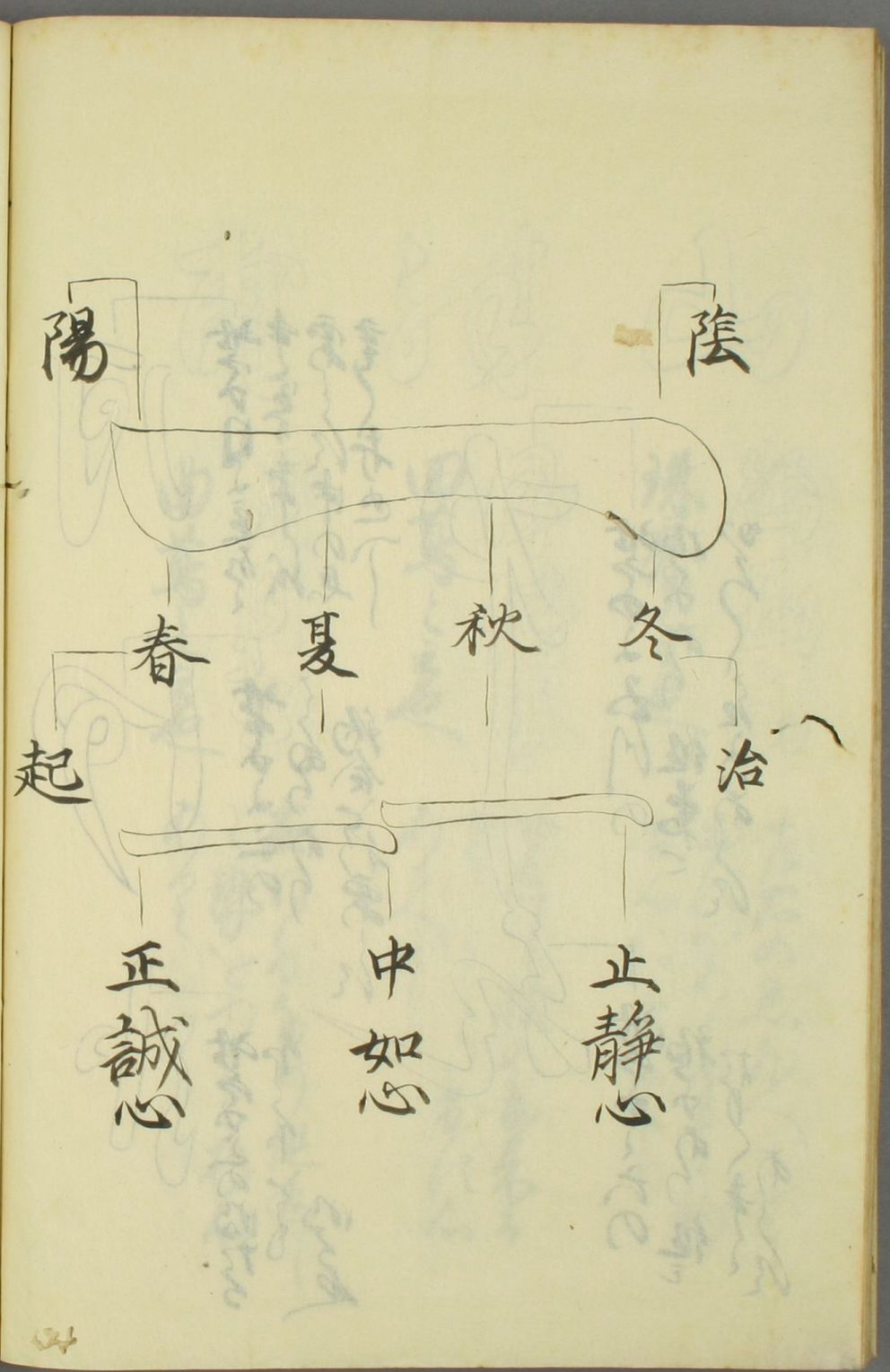
世界のよこの
くねりあり
物合に行事に
也

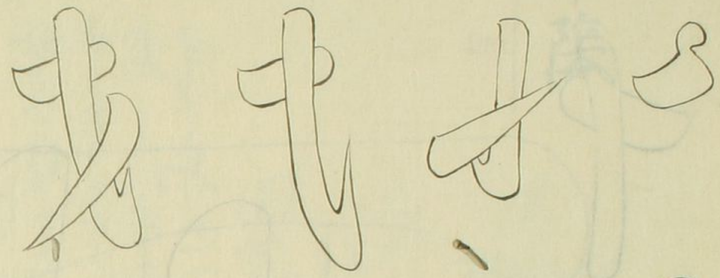
世界のよこの
ねりかたも
也

世界のよこの
物のあり但
かりくらいあり

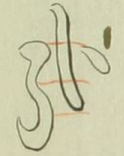
世界のよこの
物のあり但
なりくあり




陽
陰
春
夏
秋
冬
起
治
正誠心
中恕心
止静心



元禄六年醸六月上旬



是ハ本居先生
之紀されしと
載

第ノ物ヤト云ハ自然ト有ル者
ホカ物ノ集テ云ハ而已